

19世紀メキシコにおけるナシオン形成の困難

—ベネディクト・アンダースン批判—

山崎 カヲル

はじめに

本稿は、2015年末に亡くなったベネディクト・アンダースンについて、彼のいくつかの見解を批判的に検討することを目的としている。その見解のなかには、私が基本的な専門としているラテンアメリカと深くかかわる部分があるので、他人事ではありえない。アンダースン自身はタイ（シャム）、インドネシア、フィリピンといった、南アジアや東南アジアの諸地域を専門とする地域研究者であったが、その死去の直後、日本ではその死と業績とが新聞にそれなりのスペースを費やして報じられた。それは彼の地域研究への寄与のためであるより、近代的なネイションやナショナリズムの形成史に深く切り込んだ著書『想像された共同体』（初版・1983年）の影響が大きかったためであろう（邦訳題名は『想像の共同体』）。

同書についての日本での評価の一端を紹介するなら、それは「国民国家やナショナリズムについて考え、語ろうとする多くの人びとのあいだで、学問の領域間の境界を超えて、すでに『古典』と呼ばれるに相応しい地位を得ている」といわれ（若林 2002: 250）、また、「ネイションの誕生を、出版資本主義による均質的で空虚な空間の観念や巡礼などの概念を通じて明らかにした名著」（大澤・姜 2009: 376）ともいわれている。こうした「古典」や「名著」といった表現からして、日本での同書への評価はきわめて高いといつてよいであろう。

これは当然ながら日本だけの話ではない。現代のナショナリズム研究において、ベネディクト・アンダースンの仕事は、同時期のアーネスト・ゲルナー、アントニー・スミス、エリック・ホブズボーム、エチエンヌ・バリバルたちのそれと並んで、きわめつきの重要性を与えられている（Cf. Özkırmılı 2000）。アンダースンの見解はあまりにも広範に影響を与えているため、いまでは彼の著書をほとんど直接に読むこともなく、「アンダースンがいうように、ネイションとは想像の共同体であって……」といった、決まり文句が繰り返されるまになっている。ウルリヒ・ミュッケがいうように、同書へのそうした言及はあらゆるナショナリズム研究において「儀礼的」といえないまでも「義務的」になっているのである（Mücke 1999: 219）。エド・ホワイトもまた、アンダースンを批判的に読み解くことなしに、

ネイションについての彼の定義を連禱として反復する「義務的」な態度に触れて、『想像された共同体』がきわめて大衆的に受け入れられてはいても、その内実が「同時にまたかくも無視された」ことを指摘している (White 2004: 50)。

つまり、アンダーソンの基本的主張は、すでに反復的になった決まり文句として流通してしまっているのである。そしてどんな決まり文句もその儀礼的な反復を通じて、私たちの批判的な努力を削ぎ取ることはいうまでもない。批判とはプレヒト風というなら、あたりまえで自然と見られていることを、奇妙でおかしいものに変換する作業である。それは儀礼的な繰り返しを転倒・攪乱することでしか達成されない。「アンダーソンがいうように……」という合唱にただ加わるのではなく、彼の中軸的なテーゼを詳しく検証して、その検証に耐える部分と、そうではなく、抛棄されるべき部分とを見きわめる必要がある。

ただし、アンダーソンの論点は多岐にわたっており、そのすべてを取り上げることは不可能なので、ここではメキシコ (ヌエバ・エスパーニャ) を中軸にして、ラテンアメリカにおけるネイション形成を主たる題材にする。

なお、以下においては、nation ということばの多義性を考慮して、国民や民族といった特定の訳語を与えることは避け、ネイションとそのままたかかなで表記する。ナショナルやナショナリズムについても同様である。また、特にラテンアメリカにかかわる場合には、スペイン語の *nación* はネイションよりも概念的な外延が大きく、ナシオンと呼ぶよりないので、そのように記してある。

また、『想像された共同体』から引用は、2006年に刊行された第3版 (Anderson 2006) から行ない、引用箇所は本文中に (IC: 33) のように表記する。

アンダーソンへのラテンアメリカ研究での評価

アンダーソンは同書の増補版 (1991年) において、初版刊行当時、自分がスペイン語を読めなかったことを、正直に認めている (IC: xii, 26-7)。そのためもあって、彼が参照した文献はきわめて限られていた。記述の多くは専門文献としては、ジョン・リンチの『スペイン領アメリカの諸革命』と、ゲルハルト・マツアアの『ポリール』から取られている。それゆえに、文献的にはあまりにも貧弱であって、1983年当時のラテンアメリカ研究の水準からしても、およそ支持できるものではない。特に歴史研究者はこの点をたびたび問題にしており、例えば、エリック・ヴァン・ヤングは独立期メキシコを扱った大著において、ラテンアメリカにかかわる部分を「もっとも弱い箇所」だと述べている (Van Young 2001: 538)。言及はたったそれだけである。また、別の論者はラテンアメリカにおける国民的想像力を扱った論文において、一方で近年のナショナリズム研究がラテンアメリカでの経験にほとんど触れないのに対して、アンダーソンの著書は「例外」をなしていると評価しながらも、

他方で「彼が利用した資料は、きわめて制限されたものだ」とコメントしてもいる (Colom González 2003: 313)。『想像された共同体』をめぐるラテンアメリカ研究者のシンポジウム (2000 年開催) においても、文学研究者は近代ナショナリズムの情緒喚起的な側面についてのアンダーソンの主張を認めたが (ただし、19 世紀後半に限定して)、歴史学の側からの対応は比較的冷ややかなものであったらしい (Chasteen 2003: x)。少なくとも、歴史研究者の側からすれば、アンダーソンの主張の文献的根拠ははじめから疑わしいものなのである。

アメリカ大陸におけるネイションの先行性

ベネディクト・アンダーソンの基本テーゼのひとつは、新大陸におけるネイションの先行性である。通常、ネイション=国家 (いわゆる国民国家) はイギリスやフランスといった、近代西ヨーロッパ地域で誕生したとされる。ネイションについてのこれまでの多くの研究はほとんど例外なく、近代的な意味でのネイション (政治的領土の範囲内で、そこに住む人が自由かつ平等だと定義されている実体だと、とりあえず定義しておく) が、まずは西ヨーロッパにおいて誕生し、18 世紀にそこで基本的に成立したという点で一致してきた。ネイションが西ヨーロッパ起源だとするテーゼは、これまでほとんど問題視されることなく広範に受け入れられてきたのである。それに対して、アンダーソンはまっこうから批判を加える。彼によれば『想像された共同体』の基本的プランは、「新世界がナショナリズムの起源である点を強調する」ことにある (IC: xiii)。ナショナリズムの起源であるなら、当然のことだがそれはネイションの起源でもある。したがって、ラテンアメリカは彼の議論に対する試金石という役割を果たしているのである。

この仮説について、アンダーソンはかなりの自信を持っているようで、同書の増補版においてつぎのように述べている。

「『想像された共同体』への多くの言及において、このヨーロッパ中心的偏見がほとんど揺らぐことなく、ナショナリズムを生み出した両アメリカについての重要な章が、ほとんど無視されたのを見いだしたことは、私には大きな驚きであった。」 (IC: xiii)

こうしたヨーロッパ中心史観については、さらにつぎのようにも語られている。

「かくも多くのヨーロッパ人学者が、これだけそうではないという証拠がそろっているのに、それでもなおナショナリズムはヨーロッパの発明であると見なしつづけている。これほどヨーロッパ中心主義の根深さを示すものもあまりないだろう。」 (IC: 191)

前述したように、実際のところ、彼自身がなんどもわたって表明しているように (IC: xii, 26-7, 210)、初版を出した段階で彼はスペイン語を理解していなかった。したがって、ラテンアメリカについての彼の歴史的知識はすべて、英語で出された文献 (しかもごく少数の) に依拠している。そのなかにはリンチの『ラテンアメリカ諸革命』やジーン・フランコ

の『スペイン領アメリカ文学入門』といった、スタンダードでいまでもつねに参照を求められる概説書もあるが、ゲルハルト・マツアのいささか古めかしいポリーバル伝や、ロバート・ギルモアの『ベネズエラにおけるカウディージョ主義と軍国主義』という、いまではあまり読まれることのない研究が挙げられているにすぎない。文献的にはおそろしく貧弱なものであって、多くのラテンアメリカ研究者がアンダーソンに真剣な眼を向けないのは、このためもある。

一例を挙げるなら、人々のあいだで水平的連帯を生み出すための基礎条件とされる印刷資本主義そのものが、ラテンアメリカではアンダーソンがいうようには展開しなかった。ここが北アメリカと大きく異なる点である。ラテンアメリカの植民地期には、メキシコ市とリマを中心として印刷業は一定の発展をみたが、検閲は厳しく、出版物の多くは宗教的な諸ジャンルに含まれていた。コロンビアのカミロ・トレスが有名な「屈辱覚書」(1809年)で述べていたように、「啓蒙の車両であり、啓蒙を普及させようのもっとも確実な運転手である印刷は、アメリカでは他のいかなる地域よりも厳しく禁止されてきた」(Romero & Romero 1977, I: 32)のである。こうした事情が変わってきたのは、カディス憲法によって出版の自由が公に認められた1811年以降のことである (Guerra 1993: 282ff)。

また、想像された共同体の創設にとって、同時性観念を流布させるという重要な役割を果たした出版物として、アンダーソンは小説を挙げている。ところでラテンアメリカで最初の小説とされるものは、アンダーソン自身も認めているように、メキシコのホセ・ホアキン・フェルナンデス・デ・リサルディの『むずむずオウム』(El periquillo sarniento)である。本書の出版は1816年のことであった。独立運動はすでにはじまっていたのである。『むずむずオウム』は独立への傾向を先導したのではなく、独立過程そのもののなかで生まれた作品なのである。ラテンアメリカでの独立への大いなる動きが1810年(その萌芽としてなら1808年)にはじまったことは、アンダーソンもよく知っていた。であるなら、彼が特別に強調する時間の同時性という観念(新聞や小説によって普及した)は、ここではネイションの成立のまえにではなく、成立と並行して自覚されたというべきであろう。

アンダーソンが描いた印刷資本主義の抬頭は、北アメリカに関しては適切であろうが、「国境の南」ラテンアメリカでは決してそうではなかったのである。印刷資本主義を、市場の需給に連動して出版業が左右される出版市場メカニズムだと理解するなら、それは19世紀に入ってかなりたってからしか実現されておらず、アンダーソンの基本テーゼとは完全に齟齬してしまう。

ネイションの先行性

ジョシュア・フィッシュマンは、ネイションがすでに国家成立以前に存在していた「ネイ

ション—国家」(nation-state)と、まずは国家が存在し、そのあとでネーションが構築される「国家—ネーション」(state-nation)とを区別している(Fishman 1973)。このように単純な分類図式だけでは、取りこぼしてしまうものが多いが、国家とネーションとの関連を説明するためには、とりあえずネーションと国家の両者を分離して考察しておく必要がある¹⁾。

ただしイマニユル・ウォーラスティンは、『『ネーション』という概念は、歴史的システムの政治的上部構造と、つまり、国家間システムを形成し、かつ、国家間システムによって規定される主権国家と結びついている』といい、さらに、「近代世界の歴史についての系統的な考察が明らかにすると私には思われるのは、ほとんどすべての例において、広く流布されている神話とは反対に、国家がネーションに先行するのであって、その逆ではないことである」(Balibar & Wallerstein 1990: 106-7, 110)と述べており、フィッシュマンの2分法の妥当性を退けているが、私は彼に賛成である。領域国家がまずは成立し、ついでその範囲のなかでネーションという同質性を強化・拡大する傾向が力をえてくるのは、歴史的にはイギリスでもフランスでも観察可能である。他方、言語的・文化的・民族的な統一性を基盤にして、単一国家の樹立を目指す運動は、現在進行中のアイルランドやクルディスタンを典型として、世界各地に存在しているが、それらはいずれも、まずは既存の国家的な分割という枠組みを前提にして、新たな国境の線引きをするものにほかならない。それは所詮、アンダーソンのいう第2世代のナショナリズムの派生系に属するものでしかない。

メキシコについての研究のほとんどは、そこではまず国家としての独立があり、ついでその空間をネーション＝ナシオンによって埋めるという過程が、歴史的には進行したと見ている²⁾。

例えば、ブライアン・ハムネットはイベロアメリカ全体に関して、「今日的な用語の意味では、イベロアメリカには独立以前には、いかなるネーションも存在しなかった」として、ネーションという自己規定が新たに生まれたのは、独立闘争の過程においてであると主張している(Hamnett 1997: 303)。

メキシコに限るなら、ティモシー・アンナが「メキシコ人は予期されるであろう独立以前ではなく、独立のあとにメキシコを創出しなければならなかった。そして、nationhoodの過程は、それが中心的コアより多くを含むように拡張されるようになるまで、開始されえなかった」、そして「メキシコではまずは国家が、ついでネーションが到来した」と指摘している(Anna 1998: x, 5)。

「私の考えでは、独立にさいしてメキシコはネーションでもネーション国家でもなく、独立後に何年もかけてナショナルな政府をしだいに形成し(それ自体は小さいことではない)、1857年から1920年代にかけてネーション国家となったのである。」(Ibid: 8)

アンナは例外ではない。メキシコでのナシオン形成が19世紀全体にかかわる長期的な過程であったことは、ほとんどの論者が一致して承認していることである。

ナシオン不在への嘆き

実際、少したどってみると判るのは、独立のあとに到来したのは、メキシコにはネイション＝ナシオンがないという、延々たる嘆き節であった。

当時、政治的にもっとも先鋭な対立軸をなしていたのは、自由派（≒連邦主義）と保守派（≒中央集権主義）という関係であったが、この両陣営のいずれもから、同様な悲嘆の声が発せられている。メキシコがナシオンという名称にふさわしい「実体」を持っているかどうかは、クリオージョ上層部に属していたこれら知識人たちにとっては、所属する政治潮流を越えた、深刻きわまる問題であった。彼らは一様にメキシコでのナシオン成立について、深い懐疑のなかで浮遊していたのである。

まずは自由派の若き論客だったマリアノ・オテロに登場してもらおう。彼はメキシコが無謀な対米戦争（1846-48年）に破れて、国土の半分を失うという深刻な事態を振り返りながら、1848年に匿名でパンフレットを出版している。そのなかで彼は、インディオが「米軍の〔首都〕入城を、かつてメキシコを支配していたスペイン軍の入城を見るのと同様な無関心をもって見た」という。そこにはかつてナポレオン・ボナパルトの侵略に徹底して抵抗したスペイン民衆の英雄的な姿を、およそ重ね合わせるができないのである。彼はさらにいう。

「メキシコには、国民精神（*espíritu nacional*）と呼ばれるものは存在していないし、これまでも存在できないきた。というのは、ナシオンが存在しないからである（*porque no hay nación*）。実際、みずからのうちに、国内では幸福と満足とをもたらし、国外では尊敬されるためのすべての要素を持っているときに、あるナシオンはその名で呼ばれるのだとすれば、メキシコはまさしくナシオンとは呼ばれないのである。」（Otero 1967, I: 101-2）

同じような発言は、自由派のミゲル・レルド・デ・テハダにもある。彼は対米戦争敗北の原因をさまざまに挙げたうえで、もっとも重要なのはナシオンが不在だから、戦争に凝集されるべきナショナルな精神力が不在だったと結論づけている（Gonzales Navarro 1977: 27-8）。さらに、同じ陣営に属するイグナシオ・ラミレスは、保守派との激しい対立のなかで開かれた1857年の制憲議会の席上で、つぎのように演説している。

「私たちを助長している多くの幻想のうちで、同様に忌まわしいもののひとつが、われらが祖国のなかでのひとつの同質の住民（*una población homogénea*）を想定することから生じている。混血人種（*la raza mixta*）という全国に拡がっている薄いヴェールを持ち上げるなら、100ものナシオン（*cien naciones*）に出会う。私たちは現在、それらを単一のナシオンへと混ぜ合わそうという無駄な努力を重ねているのだ。」（Zarco 1956: 469）

彼が触れている「100ものナシオン」に関しては、のちにさらに言及することになる。

対立する保守派陣営も同様な認識を示していた。保守派のフランシスコ・ピメンテルは1864年という、メキシコがフランス軍の干渉戦争と第二帝政の樹立によってズタズタに引き裂れている時（彼は皮肉なことに新大陸の先住民言語の比較研究に関する国際的な権威であり、帝政派に属する知識人としては、首都から脱出して北部に逃れた自由派政権と敵対していた）、こう述べていた。

「土着民たち (los naturales) が今日のごとき状況を守っているかぎり、メキシコは厳密な意味でのナシオンという地位を獲得はできない。ナシオンとは、共通の信念を信奉し、ひとつの同じ理念に支配され、ひとつの同じ目的を有する人々の集合体である。……一国の住民たちのあいだに同質性が、類似性が存在しないなら、ひとつの同じ政府に長期にわたってしたがうことも、同じ法律のもとで生きることも不可能である。メキシコにおいて、白人とインディオとのあいだに、どんな類似性が存在するというのか。」(Pimentel 1995: 163)

ナシオンが不可能なのは、ピメンテルによると「同一の土地にふたつの異なった人民 (pueblos) がいるだけでなく、もっと悪いことに、ある程度まで敵対者であるようなふたつの人民」(Ibid: 164) がいるからなのである。

自国にはナシオンと呼ばれうるような凝縮された同質的な集合体など存在していないという嘆きは、その後も連綿と繰り返され、20世紀に入ってもつづいている。1909年に刊行された『ナショナルな大問題』という、非常に影響力があった著書の末尾において、アンドレス・モリナ・エンリケスはいまだにナシオン成立の不備を憂えて、「いまや厳密にいうところのナシオン、メキシコというナシオンを形成し、このナシオンをみずから運命についての絶対的主権者、みずからの未来の所有者かつ主人となすべき時だ」と訴える必要があった (Molina Enriquez 1909: 361)。ナシオンとしてのメキシコ (いわゆる *mexicanidad*) をめぐる懐疑は、哲学の領域にまで及んでいるが、その系譜を追うことは避ける。

とはいえ、単一のナシオンが実現不可能だとする議論のほとんどすべてが、メキシコに存在してきた乗り越えがたい「人種的」な隔壁、とりわけクリオージョとインディオとの克服困難な隔たりを持ち出していることが、つぎの検討課題になる。

インディオという問題

このように連綿とつづいてきたナシオン不在という悲嘆は、最終的にはインディオと呼ばれる存在へと収斂する。

インディオはもちろん、クリストーバル・コロソ (コロンブス) 以来の誤解から生まれたことばであって、スペイン人はそれを新大陸全体に拡張して、あらゆる先住民の呼称とした。それゆえにインディオは「植民地状況」(サルトル) の産物であって (Bonfil Batalla 1995; 1994: 121-5), 19世紀はじめからしばらくまえまでは使用が忌避されていた。インディオは

19世紀メキシコにおけるナシオン形成の困難

すでにホセ・マリア・モレーロスによって、1810年には明示的に使用を拒否されていたのである (Morelos 1985: 65)³⁾。

しかしながら、その代替案として持ち出された先住民 (indígena) もまた、19世紀自由主義の汚染を免れておらず、むしろインディオのほうが、ヨーロッパとは別個で、新たに創出されたネイション国家に先行する文化的起源や民族的アイデンティティを示している点で、「より高潔」でありうるという評価さえなされている (Turner 1997: 162-3)⁴⁾。本稿では、新大陸の本来の住民すべてを包括するという意味でインディオを復権させた第二バルバドス宣言をも踏まえた上で、インディオという用語を選択・使用する。

スペイン本国から新しく新大陸に渡ってきたスペイン人にとっても、新大陸で生まれたスペイン人にとっても、インディオはやっかいきわまる問題であった。彼らは異なった言語、異なった文化慣習や歴史、異なった社会制度を持っており、彼らとどう共存するかは、植民地体制維持にとってきわめて重大な課題であった。ハプスブルク朝スペインはその解決策として、新大陸社会をふたつに分割して、一方をスペイン人政体、他方をインディオ政体と名づけて、後者には一定の権利と義務を付したうえで、インディオを特定の範囲に封じ込める政策を打ち出している。だが、完全な隔離政策など絵に描いた餅であって、特にメキシコ市のような大都会では双方向的な人口の移動が激しく、両者を隔てる人為的な隔壁などたちまちのうちに溶解してしまっている (Lira 1983)。

隔離が不可能な場合、執りうる手段は限られている。

そのひとつは絶滅である。ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイといった、インディオ人口がかなり希薄な諸地域では、殺戮や疫病散布による絶滅政策が早くから採用されていた⁵⁾。しかしながら、メキシコやペルーのようにインディオ人口が過半数を占めるところでは、彼らは社会的再生産の不可欠な一部であって、絶滅は根本からして不可能であった。

もうひとつの手段は、混血と移民によるインディオの消滅への期待である。ベネディクト・アンダースンは19世紀初頭のコロンビアの自由派⁶⁾ ペドロ・フェルミン・デ・バルガスが、インディオに白人との雑婚を認め、彼らを買納義務から解放し、さらには土地の私的所有を進めるなら、インディオを「絶滅する」(extinguish) ことができるという発言を重視している (IC: 13-4)。ここで重要なのは、自由主義経済政策の導入とともに働いている、特異な「白人化」の発想である。このことは項を改めて論じてみたい。

インディオから白人へ

新大陸社会の「人種」的社会構成は、基本的にはスペインから到来した白人、土着のインディオと呼ばれる人々、それにアフリカから強制的に奴隷として「輸入」された黒人を3つの極にして、この3者のあいだでの複雑な混血関係の産物から成り立っている。そこには白

人を頂点にした位階構造があつて、おのおのの位階ははっきりと名づけられている。混血も同様に階層化されており、白人（スペイン人）とインディオ女性のあいだに生まれた子供はメスティソ、白人とアフリカ系のあいだの混血はムラート、インディオとアフリカ系とのそれはサンボと呼ばれ、白人>インディオ>黒人、そしてメスティソ>ムラート>サンボという秩序が作られた。時間がたつにしたがつて混血関係が進化するとともに、さらに複雑きわまる位階体系と名称とが組み上げられている。現実には、このシステムは明確なものではなく、ゴンサロ・アグレ・ベルトランがいう「肌の色の線の越境」(cruce de la línea de color) はごく当たり前のことであつた。

確かに、「人種」の位階構造を固定しようという試みはなされており、そのステレオタイプ化はいわゆる「カスタ絵画」として、私たちに残されている⁷⁾。そこではさまざまな位階が、肌の色、服装、生活環境などの差異が画像として視覚化されている。

このような絵画表現を眼にすると、私たちは植民地期のラテンアメリカ社会が整然とした「人種」区分を特徴にしていたと思ひ込むかもしれない。だが実際には、諸カスタ⁸⁾のあいだでの変動はきわめて大きなものであつたし、区分もかなりいい加減であつた。例えば、メキシコでは教会の洗礼記録に「人種」が記載されていないことが多く、「人種」の選定はせいぜい結婚のさいになされたにすぎない。そこには神父の裁量や社会的圧力などが介入する余地があつた。また、アンデス高原のアレキパやキトーでは、インディオであることが共同体所有地の分与とかかわっていた時代には、みずからをインディオだとする傾向が強かつたが、独立のあと、土地の私有化がはじまり、共有地の分与という利益がなくなると、貢納支払いという義務を逃れるために、インディオはただちに白人になっている。この飛躍は叛乱への恐怖に裏打ちされて、白人によつても受け入れられていた (Chambers 2003)。このような区分変更はラテンアメリカ各地で観察可能であつて、インディオといい白人といつても、コンテクストしだいでその内実は流動的であつた。そのうえ、これはインディオにではなく主としてパルド（アフリカ系との混血）と関係するが、財政困難に陥っていたスペイン王室は1795年の勅令によつて、「救済恩恵」(gracias al sacar) を認めた。これは一定額以上の王室への寄付をしたパルドに、白人という資格を与えるものであつて、クリオージョの強い抵抗を押し切つて実施されている (Lasso 2007: 20, 24-5; Twinam 2009)。寄付金しだいで、肌の色は変更できるのである。

このような肌の色の不断の変動は、インディオの規定に対して流動性をもたらすが、もうひとつ大きな移行図式が歴史的に用意されていた。すでに触れておいたように、白人とインディオとの混血で生まれた世代はメスティソと呼ばれたが、そのメスティソと白人とのあいだでの子供はカスティソという名で分類される。そして、カスティソと白人のあいだに生まれた世代は、正式に白人だと認められるのである。ラテンアメリカ各地で広く受け入れられていたこの図式によれば、要するに白人とのあいだで4代にわたつて混血が繰り返されると、

すべてが白人となる。フェルミン・デ・バルガスの夢想は実現不可能なものではなかった⁹⁾。もっとも、メスティソを中間段階にする白人化という道筋は、アンデス地方ではコロンビアに限定されていたのであって、ペルー、ボリビア、エクアドルではメスティソは重要視されなかった (Larson 2004: 81-7)。インディオはここでは機会さえあれば、直接に白人になったのである。

こうした経路をたどっての白人化という願望は、メキシコでもたびたび繰り返される。まずは自由派の重要なイデオログだったホセ・マリア・ルイス・モラの発言を聞こう。彼はインディオの独自の教育システムを提唱したロドリゲス・プエブラに反対して、「アステカ種族を大衆全体へと溶融させること」(la fusión de la raza azteca en la masa general)の必要性を述べる (Mora 1972: 152-3)。だが、彼がいう「大衆全体」とはメキシコ人の総体ではなく、白人に限定されていることは確かである。「白人住民はいまでは、人口からしても、教育や富からしても、公的活動で行使している全面的な影響からしても、さらには他の諸階層に対する有利な位置からしても、まったく支配的になっている。彼らのなかにこそ、メキシコ人という特徴を求めるべきであり、彼らこそが、共和国を形成すべき観念を全世界に対して決定すべきなのである。」

モラは黒人の数はわずかで、多くの土地ですでに消滅している。「太平洋および大西洋の沿岸部に残っている彼らの少数の残りは、共和国の平静にいかなる脅威ももたらさないほどまったくわずかであって、共和国の行く末にいかなる影響も与えない。半世紀もたたずに彼ら全員が消滅し、20年以上まえにはじまって、すでになりに前進している融合によって、白人人口の支配的な数に飲み込まれるだろう。」さらにいう。「同じことをインディオについて保証はできないが、最終的には彼らも同じ行く末をたどり、大衆全体に溶け込むであろう。というのも、そうした推進力がすでに働いており、抑えることは不可能だし、方向を変えることもできないからである。だが、[この過程は]より緩慢で、彼らの全面的消滅 (su total terminación) には1世紀以上かかるであろう。植民が促進され、政府がそれを一義的重要性を持ったものとみなし、あらゆる意図や努力を不変の根気でそれに向け、さらには、今日まで妨害してきたし、つねに妨害しつづけるであろう政治的・宗教的なさもしい考えを黙殺するなら、有色人の融合とカスタの全面的な絶滅とは加速され、より急速かつ幸運な消滅を期待できよう。」(Mora 1977, 1: 73-4)

インディオの消滅に「1世紀以上」かかるという時間的制約への言及は、明らかにモラが、前述したインディオ—メスティソ—カスティソ—白人という「発展」図式を前提にしていることを示している。

先に触れておいたピメンテルは、より明確であった。彼は混血の結果としての白人化の道筋を、つぎのように示している。

「ある人々はいうであろう。インディオと白人の混血は、雑種の種族、おたがいの悪徳を

受け継いだ混血種族を生み出すのではないかと。こう答えよう。混血種族は過渡的な種族 (una raza de transición) である。少したったら、全員が白人になるにいたるだろう (después de poco tiempo todos llegarían a ser blancos)。さらに、ヨーロッパ人は今後、単にインディオと混血するだけでなく、すでに存在するメスティソとも混血して、人口の大部分を占めるであろう。かくなれば、やがては数的に優越した白人世代が生じるだろう。他方、メスティソがふたつの種族の悪徳を受け継ぐとは確言できない。悪しき教育を受けたならそうなるかもしれないが優れた教育を受けるなら、反対のこと、つまり、ふたつの種族の美德を受け継ぐことが生じる。」(Pimentel 1995: 173-4)

要するに、メスティソという「過渡的な種族」を中間ステップとして、やがてはメキシコ人全体を白人にするという、ほとんど妄想に近い議論である。19世紀メキシコで繰り返し語られ試みられた白人移民政策は、こうした白人化政策の一環として、混血可能な白人人口を増加させることを目的にしていた。

現実には、混血は思ったほどには進展せず、さらに、国内情勢の不安定性、植民政策の混乱から、白人移民の流入は期待通りには進まず、白人化の前提そのものが実現しなかったものであり、夢はただの夢として終わった。

クリオージョ中心主義

以上に述べたようなアンダーソンのラテンアメリカ独立についての理解は、明らかにクリオージョ中心主義というバイアスを持っている。

ここでクリオージョ (英語読みではクレオール) とは、一般に定義される場所では、植民地時代に本国ではなく、植民地で生まれた白人 (私たちのケースではスペイン人) を指すことばである。それは「現地生まれ」を意味するポルトガル語の crioulo を語源として、最初はアフリカ系奴隷に適用されていた。このためもあってか、ペルーではクリオージョには若干の蔑称的含意がある。

クリオージョは白人だという主張そのものが、実はかなり疑わしい。

ひとつには、スペイン人自身がヨーロッパの白人である資格を十分に満たしていない、混血の「人種」だと見なされていたことが挙げられる。彼らは異様なまでに「血の純血」へのこだわりを持っていたが、非スペイン人の眼からすると、彼らの「白人」としての純粋性は疑わしいものであった。すでにイマヌエル・カントは晩年の著作『人間学』において、スペイン人とは「ヨーロッパ人の血とアラビア人 (モーロ人) の血との混濁」から生まれた存在だと断定していたほどである。

さらにまた、クリオージョについては、インディオやメスティソとの婚姻関係が進んでおり、こうした結果、「18世紀はじめまでに、インディオの血が混じっていないクリオージョ

家族はわずかとなった」(Pagden 1987: 69)とされる。つまり、クリオージョは18世紀には現実には、ほとんどが非白人との混種の産物だったとってよい。純粋な白人としてのクリオージョとは、幻想に近い存在であった。

もっとも、クリオージョの「血」についての疑惑は根強いものがあって、メキシコの強烈なクリオージョのイデオログのひとりだったアントニオ・ホアキン・リバデネイラは、メキシコ市参事会の国王への請願書(1771年)のなかで、あらためてこういわなければならなかったほどである。

「アメリカは古きスペインの人々と同じほど純粋な(tan puros como los de la antigua España)多数のスペイン人からなっております。私たちの競争相手のなかには、アメリカでは私たちのすべてがインディオである(en la América todos somos indios),あるいは、少なくともなんらかの家系からして、彼らとの混血のないものは皆無かきわめて稀だ、という考えを持っている人々がおります。」(Hernández y Davalos 1: 440)

自分たちが本国人の眼からすると、インディオとの混血でしかないという「偏見」に対する、こうした過剰ともいえる反応は、本国ゆずりのいわゆる「血の純血」イデオロギーを土台にしているが、同時に、みずからの出自に対する不安の表明でもあった¹⁰⁾。

独立が基本的にはクリオージョの仕事であって、その他の民衆、なかんずくインディオはそこでは無気力とはいわないまでも、きわめて受動的な役割しか演じていなかったし、運動に参加した場合でも、強制によるか、あるいは誘惑によるかだったとする主張は、現代においてもなされている。

ペルーにおける従来の歴史解釈に異論を唱え、新しい独立革命像を模索した論文において、ボニージャとスポールディングはリマとは区別された地方クリオージョが、サン・マルティンやボリーバルへの軍隊供給や高原地域でのゲリラ活動と関連していたとは指摘していても、ペルーの独立にさいしては、大衆のほとんどは「かの大いなる沈黙」(este gran silencio)のうちに沈み込んでいたと指摘している。もっともペルーでは、クリオージョ上層部も独立には不活発で、サン・マルティンたちによる外部からの介入があってはじめて、しぶしぶ独立を宣言したのだが(Bonilla & Spalding 1972)。

メキシコでは状況が異なっていた。1810年のイダルゴ神父の呼びかけは異様なまでの大衆の熱狂を引き起こし、バヒオ地方を中心に驚くほどの民衆参加を勝ち取っていた。しかし、ボリーバルを驚嘆させたその大衆性についても、それに水をかける作業がなされている。つぎにそのことを見てみたい。

ふたつの独立

メキシコの独立記念日は9月15日であり、この日には大統領の特別演説や、さまざまな

記念行事が営まれる。この9月15日は、1810年の同日、ミゲル・イダルゴ神父がドロレスの村で、独立叛乱を告げたことを起源にしている。それゆえに、メキシコの独立は1810年を起点にしているというのが通説である。しかしながら、それについては19世紀中葉にすでに異論が提出されていた。

この異論によれば、独立の日づけは1821年に繰り下がる。1821年独立説はルカス・アラマンが先鞭をつけたものである。19世紀前半のメキシコにおける保守派最大の論客であり政治家でもあったアラマンは、独立の歴史を振り返った大著『メキシコ史』において、独立過程が異なったふたつの勢力に担われていたことを力説する。そのひとつは、ミゲル・イダルゴや、彼を継いだホセ・マリア・モレーロスを指導者とする貧しい民衆の叛乱に結実するが、しかし、1820年には王党派政府の攻撃によってそれはすでに解体してしまっている。もうひとつは、それとは別個にアグスティン・デ・イトゥルビデの「イグアラ政綱」(1821年2月)のもとに結集して、同年9月に独立達成をなすとげた勢力である。ヨーロッパにおける1848年革命の余波を受け、それに恐怖していたと思われるアラマンの文章を引いておこう。

「それ [前者の闘争] は好んで誤って提唱されるような、ナシオン対ナシオンの戦争 (una guerra de nación a nación) ではなかった。それは抑圧権力のくびきを払いのけるために自由を求めて戦う人民の英雄的な努力ではなかった。それは実際には、財産と文明とに対するプロレタリア階級の蜂起 (un levantamiento de la clase proletaria contra propiedad y civilización) であった。」

アラマンによれば、これに対して、イトゥルビデたちの仕事はまったく別個であって、彼らによる独立の達成はイダルゴたちとは「違った人々の、違った結びつきの仕事であり、違った諸要因の結果であった」とされる (Alaman 1985, 4: 723-5)。要するに、「財産と文明」の破壊を目指すイダルゴたちのプロレタリア蜂起がまずあったが、それが鎮圧された段階で、別個の主体 (イトゥルビデたち) が登場してメキシコを独立と新しいナシオンへと導いたとされるわけである。ここでは民衆的闘争は失敗したとされ、イトゥルビデのようなクリオージョ上層部 (彼はもともと、王党派の有能な軍人であり、のちに独立派に寝返る) が主導権をとった運動が、メキシコを真の独立へと領導したとされるのである。

アラマンと同型的な発想は、実は彼とは正反対の政治的立場からも提出されている。例えば、左派に属するルイス・ビジョロは「イトゥルビデの運動はイダルゴが促進したそれとは、なんの共通性もなかったことは明らかである。1821年の独立宣言は、革命を終結させたのではないし、もちろん、革命の勝利を意味したわけでもない。それは単に、反革命派のひとつの分派が、他の分派に取って代わったというエピソードでしかなかった」 (Villoro 1986: 200) と述べて、21年の独立を「反革命」の結果にすぎないと一蹴している。ビジョロの記述は、フリードリヒ・エンゲルスが『ドイツ農民戦争』において、トマス・ミュンツァーと

マルティン・ルターへの対立として描いた事態とよく似ており、おそらくはエンゲルスの見解を意識しながら展開されている。

アラマンとビジョロに共通しているのは、エンゲルスの表現を借りるなら、「下からの」(von unten) 運動と「上からの」(von oben) の運動とが切断されており、最終的には前者と無関係な後者によってメキシコ独立は達成されたという理解である。このような理解は決してアラマンやビジョロに限られてはおらず、近年ではフランソワ＝グザヴィエ・ゲラやハイメ・ロドリゲスたちによって、かなり強力に押し進められている。例えば、ゲラは「スペイン領での諸革命の主たる種別性は、近代的大衆動員とジャコバン型の諸現象との不在にある」(Guerra 1993: 36) として、独立革命を主に植民地エリート層の仕事だという。そこでは先住民が多くを占めていた農民(アラマンの恐怖の源泉であった)への言及はほとんどなく、新大陸での黒人奴隷についてはわずかな記述があるが、彼らは「いずれにしても少数派」にすぎないとされる(Ibid: 41)。要するに、影響力は取るに足りないものだったのである。また、ロドリゲスはこう述べている。

「独立期の激動は、単一の運動ではなかった。そうではなく、さまざまな集団や地域がおのおのの異なった利害を追求していたのである。都市エリートの陰謀や政治的策謀は、農村大衆の希求とは大きく異なっていた。多くの歴史家たちは叛乱者や農業問題を強調しているが、それは独立の〔歴史〕過程の本性を曖昧にしてきた。農村での葛藤に着目することで、彼らはヌエバ・エスパーニャにおける都市と農村との関係の重要性を看過していたのである。植民地期のメキシコは大部分が農業社会だったが、都市や町に支配されていた地域であった。大小の土地所有者は、農園ではなく都市に住んでいた。同様に、インディオたちは団体村落(corporate villages)に集積されていた。それゆえに、あらゆるレベルで政治権力は都市中枢に集まっていた。1812年憲法は、アユンタミエントの政治的役割を再確認しただけでなく、これまで自治体の資格を持っていなかった町まで政治的役割を拡張したのである。叛乱者は農村の大部分を支配したが、彼らは都市の支持を獲得しないなら、勝利する望みはえられなかった。」(Rodríguez 1997: 70)

ロドリゲスが主張しているのは、1821年の独立が、イダルゴ蜂起にはじまる農村部での激動の結果であるよりも、スペインでの1808年の変動(ナポレオンによるスペイン侵略と王朝の篡奪)を出発点とした、新大陸における都市クリオージョのあいだでの混乱・動揺、新しい政治参加のさまざまな可能性への模索、カディス憲法制定への介入、復活したブルボン王朝との関係などのなかに、独立そのものの基本要因を探ることである。ここでも独立を農村大衆の動きと切り離して、都市エリート層の動向にその主導権を渡すというアラマンが開始した傾向は一貫している。ロドリゲスについては、メキシコ研究の主軸を政治史中心に戻したことを含めて、いふべきことが多いが、本稿では省略する。しかし、彼の議論が、1世紀半まえのアラマンのその延長線上でなされていることは強調されてしかるべきである

う。

いずれにしても、メキシコ独立の過程は、大衆闘争の高揚と鎮圧、別個の勢力による成果の収奪として描き出されている。このように語っている論者たちは、イダルゴとモレーロスの死後に指導部を失った民衆が、運動としては解体状況に陥り、独立の大義に寄与する力をなくしたという基本前提に立っている。しかし、1816年前後から、民衆闘争は新しい段階に入ったと見るのが正しいと思われる。それはゲリラ戦争という、すでにモレーロスの時期に部分的に姿を現していた、分散した多数の民衆による運動である。それは統一された司令塔を持たず、地域割拠という分散した形式を取っていたが、それでも王党派の正規軍を混乱・疲弊させ、正規軍と対峙するだけの資源を要求するものであった。王党派による強制的な徴兵と課税とに音を上げた地方エリート層は中央政府から距離を取るようになり、やがてはイトゥルビデに期待するようになる (Archer 1994)。後者としても、例えばアフリカ系住民が多かった南部地域を基盤にしていたピセンテ・ゲレーロのような土着の有力者の支持を期待しなければならないかぎりでは、民衆闘争による制約から自由ではなく、それを土台にしてはじめて権力を掌握できたのである (イトゥルビデがインディオのみならず、アフリカ系の人々をも視野に入れるようになったのは、ゲレーロへの配慮からであった)。大衆的な独立運動はアラマンがいうように解体したのではなく、拡散しながら、しかし勢力を保ったのである。

ネイション以前のナション

そこで問題になるのは、分散した抵抗運動の基盤として作用した、古くからのナションである。

メキシコでは非ヨーロッパ人の社会集団は、征服者によってまずはナションとして把握されていた。そのもっとも古いと思われる言説は、征服直後まで遡ることができる。私が知るかぎりでは、このように特定の民族集団に関してナションということばを当てたのは、1532年にヌエバ・エスパーニャ在住のフランシスコ会士たちが集団で国王あてに出した書簡がはじめてである。そこでは当地の「先住民」(naturales)が「このナション」(esta nación)と呼ばれている (Motolinía 1982: 438)。また、18世紀中葉に書かれたソノラの地誌は、同地にいたピマ、オパタ、セリ、アパッチといったインディオ集団をすべてナションと呼んでいる (Nentvig 1971: 98ff)¹¹⁾。このような用法は19世紀になってもつづいていて、長く叛乱を起こしていたソノラ州のヤキ人はずっと、ナションだと規定されていた (Hu-DeHart: 1984)。インディオだけではない。1683年に初演されたソル・フアナ・イネス・デ・ラ・クルスの詩劇『ある家族の切望』の最後は「スペイン人、黒人、イタリア人、メキシコ人という4つのナションのサラオ」(sarao de cuatro naciones que son españoles, negros, italianos

y mexicanos)で締めくくられる。ここでもメキシコ人とはインディオの別名にほかならない。そこではスペイン人もイタリア人も、インディオと同等なナシオンだと把握されている。

このことはなにもラテンアメリカに限られていたわけではない。米国においても、ヒューロン、デラウェア、イロクオイ、セネカといったインディアン集団は、まずもってネイションという単位だとして把握されており、各種の裁判においてもネイションとして州政府や連邦政府と対峙していた。エド・ホワイトはアメリカ合州国がこうしたインディアン・ネイションとのかかわりで成立したとさえ主張している (White 2004)。

まえに引用していた演説において、イグナシオ・ラミレスが単一のナシオンというヴェールを取り去ってみれば、そこには「100ものナシオン」があると述べたのは、まさしくこのような近代的ネイションの形成以前に実在を認められていたナシオンにほかならない。これらのナシオンの部厚い基層こそが、ボンフィル・バタジャが語った「深いメキシコ」なのである。啓蒙思想とフランス革命に影響されてラテンアメリカに導入された近代的なナシオンは、いってみればこのような古層のナシオンのうえに構築されたのであって、それは形式的には後者の否定のうえに成り立っていたとしても、つねにそれとの相互作用のなかで生存しなければならなかった。

クリオージョ中心主義

ベネディクト・アンダースンのいう新大陸でのナショナリズム先行論は、さまざまな無理があり、そのままではどうも支持できないものである。特に彼がいわゆる通説に安易に寄りかかって発言する場合、それは顕著になる。クリオージョ中心主義もそのひとつだといつてよい。

ここでクリオージョ中心主義というのは、独立闘争の基本的な担い手がクリオージョにあったとする見解である。なによりもまず、独立という事態に直面したクリオージョは、統一した主体としてそれを統御できなかった。人的・経済的な利害関係からして、クリオージョは本国人と完全には分離されていなかったのである。アンダースンは聖俗ふたつの世界において、新大陸生まれの白人が差別されており、そのことがクリオージョとしての一体性を強化したと主張しているが、本国人による役職独占とは (18世紀後半に多少強化されるが) かなり疑わしい仮説である。アントニオ・ジェルビなどは、それは1811年のカディス会議あたりで生まれた「神話」だとも極言している (Gerbi 1982: 228)。そこまで強くいわないまでも、1633年から王室が採用したアメリカでの役職の売り出しのおかげで、聖俗ともに上位役職者にクリオージョが大量進出したことは確かである。1725年、ついで1771年にメキシコ市参事会 (クリオージョの牙城) が国王宛に出した請願書では、ともに聖俗役職の最高位もクリオージョが担うべきだという要求が語られているが、それはエリート層のかな

りの部分を彼らがすでに占めていることを逆照射してもいる。

現実には、独立前後のクリオージョは、決してまとまったアイデンティティを持ってはおらず、利害も分裂していた。ヌエバ・エスパニーヤ、ベネズエラ、ペルー等において、多くのクリオージョが王党派に加わり、独立に反対したという事実が、それを示している。イトゥルビデがまだ王党派軍人だった1812年に上官のガルシア・コンデにあてた手紙のなかで、つぎのように力説しているのがよい証拠となろう。

「若干の無教養な愚かものたちのあいだにある、私たちの戦いがヨーロッパ人とアメリカ人とのあいだでのそれ (nuestra guerra es de Europeos a Americanos y de estos a los otros) だという考えを取り除くために、私としてはつぎのように述べます。このたびの機会に、まさしく偶然にも起こったことは、そこに参集したすべてのものたちは、だれひとり例外もなくアメリカ人 (Americanos sin excepcion de persona) だったということであります。私はそのことに満足しております。というのは、若干のものたちがこのスペイン人の国 (este País Español) に投げかけた黒い染みが、彼らの手によって拭い取られるのを見るのは、私の喜びだからです。私が確信しておりますのは、私たちの戦いが、善人と悪人との、忠実なものとの叛乱者との、キリスト教徒と放蕩者とのそれだということであります。」(Osorno Castro 1940: 230)

しかし、アンダーソンは断固としてクリオージョを擁護する。彼は「このことはメスティソ、黒人、インディオに対するクリオージョの人種差別主義の並行的成長を軽視することを意味しない」という限定をつけながらも、「ここで私が強調しているのは、半島人とクリオージョとを分かつ人種的区別であって、その理由は、問題となっている主な課題が、クリオージョ・ナショナリズムの勃興にあるからである」(IC: 60) ということ、独立にさいしてのクリオージョの決定的なイニシアティブを認めている。

というより、アンダーソンの独立理解では、クリオージョがまずはヨーロッパに先立ってネイション性 (nation-ness) という観念をはぐくみ、抑圧されスペイン語を話さない住民たちを「同胞国民」(fellow-nationals) と再定義したことになる (IC: 50)。そこで成立されるといわれる感情的一体感こそが、現実に存在するさまざまな差異を抹消して、人々をネイションという同質的な枠組みへと流し込むのである。そして、その主導権はあくまでもクリオージョが握っている。「メスティソ、黒人、インディオ」は受動的にそこに組み入れられるだけである。

アンダーソンにとって不幸なのは、上記のような参照枠は『想像された共同体』初版が出された1983年段階で、すでに崩れてしまっていることである。

民衆レヴェルでのナショナリズムやリベラリズムが、従来の公式化されたそれらとは異質な相貌を持って存在していたことがしだいに明らかになってきた現在、独立過程におけるクリオージョとインディオとのかかわりも、別個に再定式化される必要がある。アンダーソン

が前提していたような通説は保ちえないのである。

ラテンアメリカに関して、このような通説に対する根底的な疑問が提出されたのは、ペルーの対チリ戦争（チリ軍による占領を含めて1879年から84年まで継続）の再検討にさいしてのことである。軍事的敗北後にはやばやとチリへの迎合を決めたペルーの支配階級（リマに集中していた）とは異なって、特に高地での抵抗闘争が、アンドレス・カーセレスという指導者のもとで統一されてなされていた。というより、カーセレスは無数の民衆抵抗運動の結節点として活動したというべきであろう。

私はペルーでの議論の展開を知悉しているわけではないが、先住民は外国の侵略に対して無関心であり、パトロンたちによって強制的に動員されることではじめて、しぶしぶと銃を取ったわけではなく、彼らなりのナショナルな抵抗意識をもって積極的にチリ軍と対決したのである。

通説への鋭い批判は1980年代前半にネルソン・マンリケ（『農民とナシオン——対チリ戦争における先住民ゲリラ』1981年）やフロレンシア・マロン（『ペルー中央高原における共同体の防衛』1983年）などの出版によって開始された。そして対立する諸論点が整理されてアンデス地域の専門研究者以外にも近づきやすいかたちで提出されたのは、おそらくはスティーヴ・スターンが編集した論文集『アンデス農民世界における抵抗・叛乱・自覚』（1987年）においてだったと思われる。そこでは通説を代表するエラクリオ・ボニージャと、彼に対する批判者であるマロンがともに相手の見解を意識しながら、相互に批判を展開することで、私たちに問題の所在をくっきりと浮き彫りにしてくれている（Bonilla 1987; Mallon 1987）。議論の焦点になったのは、反チリ闘争における農民の位置であって、ボニージャはそれを受動的なもののみなし、ナショナルなもの萌芽を認めないのに対して、マロンは農民独自のナショナリズムの存在を肯定して、彼らがりマとは別個に独自の闘争を展開したことを強調している。

つまり、『想像された共同体』の初版（1983年）と増補版（1991年）とのあいだの時期に、ラテンアメリカでのナショナリズム研究は大きくかたちを変えはじめていたのである。この変容はその後にマロンによって、ペルーだけでなくメキシコをも視野に入れた比較研究の成果として1995年に重厚な著書『農民とネイション』（Mallon 1995）が出版されたことで、さらに明確になった。マロンたちの仕事は、さらにメキシコに関してはピーター・グアルデイーノ、ガイ・トムスン、マイケル・ドゥセイたち、アンデスに関してはトリスタン・プラットやマーク・ターナー、ブルック・ラーソン、セシリア・メンデスといった優れた研究者が現れて、近代的なクリオージョ・ナショナリズムによってこれまで覆い隠されてきた農民的でサバルタンなナショナリズムの流れが顕在化したのである。それは独立期の運動にまで延長された結果、独立の過程で働いていた複数のナシオンへと注目が集まり、それは地方モノグラフとして拡充されている。

そうした研究のあいだにはそれなりの意見の相違があるが、しかし彼らが一様に強調しているのは、1808年のスペイン王朝危機、1810年にはじまるカディスでの議論と憲法制定、そのなかで白熱した議論となった人権・自由・平等といった抽象概念と、それらの具体的な制度的担い手をめぐる討論が、非識字者がほとんどを占めたインディオやアフリカ系の民衆によって真剣に受け止められ、消化され、日々の闘争に徹底して利用されたことであった¹²⁾。もちろん、そのためには憲法の無味乾燥な諸条項や、カディスでの多様な議論を、土着の人々の日常の実践につないでゆく無名の「有機的知識人」(下級僧侶、弁護士、書記、教員、少数の識字者農民)の介入が必須であったが、それにしても新しい憲法やそれをめぐる討論は、権利的平等や貢納・強制労働からの自由、市町村レベルでの新しい組織化や運営方法といった諸課題について、民衆の強い注意を喚起したのである。

18世紀後半の大きな社会闘争、つまり例示するなら、コロンビアでのコムネロスの蜂起、アンデスにおけるトゥパク・アマルーたちの大叛乱、メキシコはミチョアカンを中心とした大衆運動は、すべて先住民運動としてくくってしまえない、複数階級的・身分的な複合闘争であって、この点では来たるべき独立闘争と共通する部分があったが、その要求したところは主として18世紀中葉に本格化したブルボン改革以前の旧来の秩序への復帰であった。それはしばしば、1700年までつづいたハプスブルク朝時代の古い社会契約への郷愁に彩られており、体制変革というよりも、むしろ後ろ向きの復古運動という色彩が濃かったといえる。

これに対して独立期の諸運動は、単なる過去への回帰ではなかった。そこではあくまでもカディスでの議論を踏まえたうえで、近代的ナシオンの世界のなかでいかにして農民たちの希求を実現できるのかが探求されたのである。この点が従来の諸闘争と大きく異なっており、したがって、使われることばも平等や自由、地方代表制といった別のセットになっている。つまり、新しい運動は一度近代のネイション=ナシオンを経たうえで、なおかつ古いナシオンの形式を残す努力だったといつてよい。ポンフィル・バタジャのいう「深いメキシコ」は、そこではかつてから現在までつづく、変化のないメキシコであった。しかしながら、独立闘争において立ち上がったのは、近代の洗礼を受けたうえで、地方ごとに試みられた別のナシオンへの模索であって、それは全国的な政治動向をつねに視野に入れていたために地方孤立主義ではなかったし、かつてのインディオ政体への単純な復帰など目指していないがゆえに復古主義でもなかった(部分的には、そのような側面がなかったわけではない)。

ベネディクト・アンダースンの最大の問題は、こうした傾向を摘出する方向に歴史学や人類学が大きく舵を切った時期に、それによって廃棄されてしまう古い研究事情に捕らわれたままであったことであろう。ナショナリズムは全体包括的な運動であるが、そこには異質で多様なネイションへの企図が含まれており、支配的なクリオージョ・ナショナリズムだけでなく、それと拮抗したり融合したり離反したりするいくつものナシオンへの志向が同時的であったのである。アンダースンのクリオージョ中心主義は、そのような方向性や可能性を閉

ざすことになりかねない。『想像された共同体』は、特にその第4章「クリオージョの先駆者たち」は、以上のような但し書きをつけて読まれるべきなのである。

注

- 1) ネイション（ナシオン）と国家の記述レベル上の区別を明確化した功績は、重農主義経済学者フランソワ・ケネーにまで遡ることができる。
- 2) これはペルーにおいては、もっとドラスティックであった。ペルー国家は人口の90%以上を占めるインディオや黒人を、みずからのナシオンの構成員だとは認定しなかったのである（Cf. Thurner 1997）。
- 3) モレーロスは1813年1月29日の布告においても、「インディオ、ムラート、メスティソ、テンテ・エン・エル・アイレなどの麗しき符丁は廃棄され、唯一土地の名前で呼ばれるのであって、全員をアメリカ人と名づけ云々」と語っている（Morelos 1985: 109）。
- 4) インディオと先住民との概念的な交錯については、概念史的な観点からの研究がある（Ramírez Zavala 2011）。
- 5) そのもっともドラスティックな例は、ウルグアイにおけるチャルーア人の殺戮であろう。彼らはウルグアイ初代大統領によって、非武装で来るよう大規模なバーベキューパーティに招かれ、その席で全員が抹殺された。それだけではなく、彼らの存在や殺害といった事実そのものが、歴史的な記憶から削り取られてしまったのである（Verdesio 2003）。
- 6) 実際にフェルミン・デ・バルガスがこう語ったのは、1790年代のことである。
- 7) 「カスタ絵画」についての包括的な研究は、イローナ・カツェフが行っている（Katzew 2004）。
- 8) カスタはインドのカーストに語源を発しているが、インドとは異なって宗教的色彩はなく、また、ゆるやかな上昇婚を伴っているので、ここではカスタとだけ呼んでおく。
- 9) 黒人のケースにおいては、さらにひとつの世代が要求されたし、第4世代でムラートに戻ってしまうという図式も存在していた（Chance 1978: 211-2）。なお、仏領カリブ地域においても、5世代にわたる白人との混血が、黒人を白人化するという説が流布していた（平野 2002: 96）。
- 10) リバデネイラはインディオについては、こう述べている。「インディオたちは、神が罰を下したなんらかの人種の子孫であるか、服従した民族の一員であるか、あるいは、わずかな文化しか持たないかといった理由によって、征服のあと数世紀になっても、貧困のなかに生まれ、粗野に育ち、懲罰によって動き、もっとも厳しい労働で身を立てており、恥も名誉も希望もなく生きております。このために、衰微して気力がなく、墮落（el abatimiento）が彼ら特有の性格であります。このことについては、優れた著者たちすべてが語っており、彼らは長期の観察と多くの説明によって、彼らの著書のなかで、インディオに対して、墮落している（abatidos）という罵倒を浴びせております。これらの著書を読んだあげく、おそらくは理解ができないのか、性急に結論したのでしょうか、そこにある表現をアメリカ・スペイン人にあてはめて間違っってコピーしております。」（Hernández y Dávalos, I: 439）
- 11) また、ベラスケス（Velazquez 1974）も参照。
- 12) カデイスでの議論が熱心かつ急速に民衆のものになっていったプロセスについては、ついでには、ルジュリーやグアルディーノの研究（Rugeley 1996; Guardino 1996; 2006）が詳しい。

参考文献

- Alamán, Lucas 1985 *Historia de México*, 5 tomos, México: Fondo de Cultura Económica.
- Anderson, Benedict 2006 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised edition, London: Verso. 白石隆・白石さやか訳『定本 想像の共同体』書籍工房早川
- Anna, Timothy E. 1998 *Forging Mexico 1821-1835*, Lincoln: Univ. of Nebraska Press.
- Archer, Christon I. 1994 "Insurrection—Reaction—Revolution—Fragmentation: Reconstructing the Choreography of Meltdown in New Spain during the Independence Era," *Mexican Studies/Estudios Mexicanos*, 10, pp. 63-98.
- Balibar, Etienne & Immanuel Wallerstein, 1990 *Race, nation, classes. Les identités ambiguës*, Paris: La Découverte. 若森章孝他訳『人種・民族・国家』1997年, 大村書店
- Bauer, Ralph & Jose Antonio Mazzotti, 2009 "Introduction: Creole Subjects in the Colonial Americas," in: *Creole Subjects in the Colonial Americas: Empires, Texts, Identities*, ed. by Ralph Bauer & Jose Antonio Mazzotti, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, pp. 1-57.
- Bolívar, Simón 1969 *Escritos políticos*, Madrid: Alianza.
- Bonfil Batalla, Guillermo 1994 *México profundo. Una civilización negada*, México: Grijalbo.
1995 "El concepto de indio en América. Una categoría de la situación colonial," en: *Obras escogidas*, tomo I, México: Instituto Nacional Indigenista, pp. 337-57.
- Bonilla, Heraclio 1987 "The Indian Peasantry and "Peru" during the War with Chile," in: *Resistance, Rebellion, and Consciousness in the Andean Peasant World, 18th to 20th Centuries*, ed. by Steve J. Stern, Madison: Univ. of Wisconsin Press, pp. 219-31.
- Bonilla, Heraclio & Karen Spalding 1972 "La Independencia el el Perú: las palabras y los hechos," in: Heraclio Bonilla, et al., *La Independencia el el Perú*, Lima: Instituto de Estudios Peruanos, pp. 15-64.
- Brading, David A. 1991 *The First America: The Spanish Monarchy, Creole Patriots, and the Liberal State, 1492-1867*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Cahill, David 1994 "Colour by Numbers: Racial and Ethnic Categories in the Viceroyalty of Peru, 1532-1824," *Journal of Latin American Studies*, 26, pp.
- Chambers, Sarah C. 2003 "Little Middle Ground: The Instability of a Mestizo Identity in the Andes, Eighteenth and Nineteenth Centuries," in: *Race and Nation in Modern Latin America*, ed. by Nancy P. Appelbaum, et al., Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, pp. 32-55.
- Chance, John K. 1978 *Race and Class in Colonial Oaxaca*, Stanford: Stanford Univ. Press.
- Chasteen, John Charles 2003 "Introduction: Beyond Imagined Communities," in: *Beyond Imagined Communities: Reading and Writing the Nation in Nineteenth-Century Latin America*, ed. by Sara Castro-Klaren and John Charles Chasteen, Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press, pp. ix-xxv.
- Colom González, Francisco 2003 "La imaginación nacional en América Latina," *Historia Mexicana*, 53, pp. 313-39.
- Ducey, Michael T. 2004 *A Nation of Villages: Riot and Rebellion in the Mexican Huasteca, 1750-*

- 1850, Tucson: Univ. of Arizona Press.
- Earle, Rebecca 2001 "Creole Patriotism and the Myth of the 'Loyal Indian,'" *Past and Present*, No. 172, pp. 125-45.
- Fishman, Joshua 1973 *Language and Nationalism: Two Integrative Essays*, Rowley: Newbury House.
- Flores Galindo, Alberto 1987 "In Search of a Inca," in: *Resistance, Rebellion, and Consciousness in the Andean Peasant World, 18th to 20th Centuries*, ed. by Steve J. Stern, Madison: Univ. of Wisconsin Press, pp. 193-210.
- Florezano, Enrique 1999 *Memoria indígena*, México: Taurus.
- 2001 *Etnia, estado y nación. Ensayo sobre las identidades colectivas en México*, 2a ed., México: Taurus.
- González Navarro, Moisés 1977 *Anatomía del poder en México 1848-1853*, México: El Colegio de México.
- Guardino, Peter F. 1996 *Peasants, Politics, and the Formation of Mexico's National State: Guerrero, 1800-1857*, Stanford: Stanford Univ. Press.
- 2005 *The Time of Liberty: Popular Political Culture in Oaxaca, 1750-1850*, Durham: Duke Univ. Press.
- Guerra, François-Xavier 2000 *Modernidad y independencia. Ensayos sobre las revoluciones hispanicas*, México: Mapfre/Fondo de Cultura Económica.
- Hamnett, Brian 1997 "Process and Pattern: A Re-examination of the Ibero-American Independence Movements, 1808-1826," *Journal of Latin American Studies*, 29, pp. 279-328.
- Helg, Aline 2003 "Simón Bolívar and the Spectre of José Padilla in Post-Independent Cartagena," *Journal of Latin American Studies*, 35, pp. 447-71.
- Hernández y Dávalos, Juan E. 1985 *Historia de la Guerra de Independencia de México*, 6 tomos, México: Instituto Nacional de Estudios Históricos de la Revolución Mexicana.
- Hu-DeHart, Evelyn 1984 *Yaqui Resistance and Survival: The Struggle for Land and Autonomy, 1821-1910*, Madison: Univ. of Wisconsin Press.
- Katzew, Ilona 2004 *Casta Painting: Images of Race in Eighteenth-Century Mexico*, New Haven: Yale Univ. Press.
- Larson, Brooke 2004 *Trials of Nation Making: Liberalism, Race, and Ethnicity in the Andes, 1810-1910*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Lasso, Marixa 2007 *Myths of Harmony: Race and Republicanism during the Age of Revolution*, Pittsburg: Univ. of Pittsburg Press.
- Lempérière, Annick 1998 "República y publicidad a fines del Antiguo Regimen (Nueva España)," in: François-Xavier Guerra, et al., *Los espacios públicos en Iberoamérica. Ambigüedades y problemas. Siglos XVIII-XIX*, Mexico: Centro Francés de Estudios Mexicanos y Centroamericanos/Fondo de Cultura Económica, pp. 54-79.
- Lira, Andrés 1983 *Comunidades indígenas frente a la ciudad de México. Tenochtitlán y Tlatelolco, sus pueblos y barrios, 1812-1919*, México: El Colegio de México/El Colegio de Michoacan.
- Lomnitz, Claudio 1992 *Exits from the Labyrinth: Culture and Ideology in the Mexican National*

- Space*, Berkeley/Los Angeles: Univ. of California Press.
- 2001 *Deep Mexico, Silent Mexico: An Anthropology of Nationalism*, Minneapolis: Univ. of Minnesota Press.
- López Cámara, Francisco 1954 *La génesis de la conciencia liberal en México*, México: Siglo XXI.
- Lynch, John 1986 *The Spanish American Revolutions 1808-1826*, 2nd. edition, New York: W. W. Norton.
- Mallon, Florencia 1987 "Nationalist and Antistate Coalitions in the War of the Pacific: Junin and Cajamarca, 1879-1902," in: *Resistance, Rebellion, and Consciousness in the Andean Peasant World, 18th to 20th Centuries*, ed. by Steve J. Stern, Madison: Univ. of Wisconsin Press, pp. 232-79.
- 1995 *Peasant and Nation: The Making of Postcolonial Mexico and Peru*, Berkeley/Los Angeles: Univ. of California Press.
- Méndez, Cecilia 2005 *The Plebeian Republic: The Huanta Rebellion and the Making of the Peruvian State, 1820-1850*, Durham: Duke Univ. Press.
- Molina Enríquez, Andrés 1909 *Los grandes problemas nacionales*, México: A. Carranza e Hijos.
- Mora, José María Luis 1972 *Obras sueltas*, México: Porrúa.
- 1977 *México y sus revoluciones*, 4 tomos, México: Porrúa
- Morelos, José María 1985 *Antología documental*, ed. por Carlos Herrejon, México: CONACULTA.
- Motolinía (Tribio de Benavente) 1982 *Memoriales o libro de las cosas de la Nueva España y de los naturales de ella*, ed. por Edmundo O'Gorman, México: Universidad Nacional Autónoma de México.
- Mücke, Ulrich 1999 "La desunión imaginada. Indios y nación en el Perú decimonónico," *Jahrbuch für Geschichte Lateinamerikas*, 36, pp. 219-32.
- Nentvig, Juan 1971 *Descripción geográfica, natural y curiosa de la Provincia de Sonora*, México: Archivo General de la Nación.
- Osorno Castro, Fernando 1940 *El insurgente Albino García*, México: Editorial "México Nuevo".
- Otero, Mariano 1967 *Obras*, 2 tomos, México: Porrúa.
- Özkırmılı, Umut 2000 *Theories of Nationalism: A Critical Introduction*, Houndsmills: Palgrave.
- Pagden, Anthony 1987 "Identity Formation in Spanish America," in: *Colonial Identity in the Atlantic World, 1500-1800*, ed. by Nicholas Canny and Anthony Pagden, Princeton: Princeton Univ. Press, pp. 51-93.
- Pimentel, Francisco 1995 *Dos obras de*, México: CONACULTA.
- Ramírez, Ignacio 1949 *México en pos de la libertad*, México: Empresas Editoriales.
- Ramírez Zavala, Ana Luz 2011 "Indio/indígena, 1750-1850," *Historia Mexicana*, 60, pp. 1643-81.
- Ramos, José Marcial 1999 "Simón Bolívar y la abolición de la esclavitud en Venezuela 1810-1830: Problemas y frustración de una causa," *Revista de Historia de América*, No. 125, pp. 7-20.
- Rodríguez O., Jaime E. 1997 "The Constitution of 1824 and the Formation of the Mexican State," in: *The Origins of Mexican National Politics 1808-1847*, ed. by Jaime E. Rodríguez O., Wilmington: Scholarly Resources, pp. 65-84.
- Romero, José Luis & Luis Alberto Romero 1977 *Pensamiento político de la emancipación (1790-*

- 1825), 2 tomos, Caracas: Biblioteca Ayacucho.
- Rugeley, Terry 1996 *Yucatan's Maya Peasantry and the Origins of the Caste War*, Austin: Univ. of Texas Press.
- Safford, Frank 1991 "Race, Integration, and Progress: Elite Attitudes and the Indian in Colombia, 1750-1870," *Hispanic American Historical Review*, 71, pp. 1-33.
- Sanders, James E. 2004 "Citizen of a Free People": Popular Liberalism and Race in Nineteenth-Century Southwestern Colombia," *Hispanic American Historical Review*, 84, pp. 277-313.
- Thurner, Marc 1997 *From Two Republics to One Divided: Contradictions of Postcolonial Nation-making in Andean Peru*, Durham: Duke Univ. Press.
- Twinam, Ann 2009 "Purchasing Whiteness: Conversations on the Essence of Pardo-ness and Mulatto-ness at the End of Empire," in: *Imperial Subjects: Race and Identity in Colonial Latin America*, ed. by Andrew B. Fisher & Matthew D. O'Hara, Durham: Duke Univ. Press, pp. 141-65.
- Van Young, Eric 2001 *The Other Rebellion: Popular Violence, Ideology, and the Mexican Struggle for Independence, 1810-1821*, Stanford: Stanford Univ. Press.
- Velázquez, María del Carmen 1974 "Los apaches y su leyenda," *Historia Mexicana*, 24, pp. 161-76.
- Verdesio, Gustavo 2003 "An Amnesic Nation: The Erasure of Indigenous Pasts by Uruguayan Expert Knowledge," in: *Beyond Imagined Communities: Reading and Writing the Nation in Nineteenth-Century Latin America*, ed. by Sara Castro-Klaren and John Charles Chasteen, Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press, pp. 196-224.
- Villoro, Luis 1986 *El proceso ideológico de la Revolución de Independencia*, México: CONACULTA.
- White, Ed 2004 "Early American Nations as Imagined Communities," *American Quarterly*, 56, pp. 49-81.
- Zarco Francisco 1956 *Historia del congreso extraordinario constituyente [1856-1857]*, Mexico: El Colegio de México.
- 遠藤泰生・木村秀雄編『クレオールのかたち カリブ地域文化研究』2002年, 東京大学出版会
大澤真幸・姜尚中編『ナショナリズム論・入門』2009年, 有斐閣
平野千果子『フランス植民地主義の研究』2002年, 人文書院
若林幹夫「ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』」大澤真幸編『ナショナリズム論の名著50』2002年, 平凡社, pp. 250-60。